



2012 年 9月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 47

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 39 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 家々や菜の花いろの燈をともし 木下夕爾

この句は、敗戦翌年の春に詠まれたものですね。節電が叫ばれ、LED電球への移行が進んでいる現在、この馴染み深い黄色い白熱電球の句に郷愁を覚えるのは、私ひとりだけではないと思われます。でも、「菜の花いろの燈」では季語になりませんね。この句が春の名句と言われるのは、夕暮れの菜の花いろの灯と、それに対する家族の温かい思いだけでなく、この句から一面に広がる菜の花畑が見えてくる為でしょうか？

会長 > ご指摘の通り、「菜の花色」では季語になりません。作者はそれを承知の上で公開したのでしょう。俳句を鑑賞する際に大切なことは、作者の思いに近づいてみることです。まだ少し寒い早春の夕暮れ、作者は家々が灯をつけている町並を見下ろしているのでしょう。菜の花は素朴な花。その色には暖かさがあります。人々が取り戻した平和な暮しへの賛歌ですね。風景を菜の花畑に重ねていると言えなくもないですが、無季の句として評価すべきでしょう。

高橋 > 会長にも、節電に相応しい面白い素敵な滑稽句がおありですね。

エアコンか扇風機かとうちわ揉め 八木健

エアコンと扇風機と団扇だけで咄嗟に十七音字の機知俳句を詠まれましたね。この句に笑いながらも感心させられてしまいます。

さて、遊んでばかりもいられませんので、今日の本題に入らせて戴きますね。本日

は、先月に引き続き、紅緑「滑稽俳句集」の「冬動物」の部、季語は「鴨」「鴛鴦」です。ご解説、お願い致します。

尻なりに鴨見て入りぬ門の口 乙二

人間のやもめを思へ鴛二つ 子規

大木の鴛鴦推しわけて流れけり 鳴雪

会長 > では、一緒に鑑賞してゆきましょう。

「尻なりに鴨・・・」、鴨を視界におきながら、あとずさりしている。そんな風景ですね。

「人間のやもめ・・・」、鴛はおしどりですね。番の鴛を見て、「人間のやもめを思へ」は、鴛に言ってるんです。お前たちは「鴛夫婦」と呼ばれて仲がいい、人間のヤモメが鴛のことを羨ましく思っているよ。ぐらいですか。

「大木の鴛鴦・・・」、川面の鴛を分けて大木が流れゆくという風景です。

高橋 > 鳴雪は、番の鴛鴦を押し分けて流れる大木の姿に少し意地悪な快感を覚えているようですね。

次の季語は「木兔」「梟」「鷹」です。木兔(みみずく)は、ふくろう科の鳥のうち頭側に長い羽毛(耳)を持つものの総称ですね。

木兔や思ひ切つたる晝の面 芥境

木兔の眼を明いて居る眞晝哉 碧玲瓏

梟の頭巾ほしいと鳴夜哉 蘭中

鷹匠は鼻のかまれぬ寒さ哉 乙由

会長 > 「木兔や思ひ・・・」、目は大きく開いて思い詰めたような表情。それを思いきつたとしたのですね。

「木兎の眼を・・・」、木兎の目は大きくてきれいです。夜行性ですが昼も目を開いています。それが意外なのでしょう。私は子供の頃に梟や木兎を飼ったことがあります。

「梟の頭巾・・・」、梟の東部は丸くなっていて、頭巾でもかけたらよろしいという形ですね。

「鷹匠は鼻の・・・」、鷹狩りは吹きさらしの荒野で、水洩も出るでしょう。鷹匠は腕に鷹をとまらせていますから、鼻をかめませんね。

高橋 > 有難うございました。会長さんは、子供の頃に梟や木兎を飼ったことがおありとか。真夜中の餌やり、想像するだけでも大変ですね。

次の季語は口の大きな「鮫鰐」と「牡蠣」です。どちらも寒い冬の日、鍋にすると美味しそうですよ。

鮫鰐の口ほどもなき命かな 三千彦

鮫鰐の口にさしこむ旭哉 鳴雪

鮫鰐の顔に喰ひつく親爺哉 四方太

牡蠣飯の釜畫きたる行燈かな 鳴雪

会長 > 「鮫鰐の口ほども・・・」、鮫鰐の口は大きいですから、その大きさから強そうに見えても、吊るし切りされて、あっという間に一命を落とす哀れを言っているのですね。

「鮫鰐の口に・・・」、これは吊るし切りされる直前なのでしょう。鮫鰐の大口ゆえに朝日もさしこむというわけですね。

「鮫鰐の顔に・・・」、鮫鰐鍋ですね。こいつは頭だなどと言いながら食べているのでしょう。

「牡蠣飯の釜・・・」、行燈に描かれた絵は、看板を兼ねていて、メニュー紹介のようなものですね。

高橋 > 鮫鯨の姿が見えてくる様な面白いご解説でした。

次の季語は、「鰻」です。鰻は美味ではありますが、やはり昔から毒のある怖い魚と見えて、句材には好まれ、数多の句が詠まれていますよ。

手を切ていよいよにくし鰻の面 其角

我戀は鰻も食はれぬ命かな 嵐夕

鰻汁はいかな坊主もおそれけり 鬼貫

河豚賣に食ふべき顔と見られけり 太祇

河豚食ひし人の寝言の念仏哉 太祇

会長 > 「手を切て・・・」、「鰻」は「河豚」と書かれることが多いですね。河豚は釣り上げた直後に、互いを傷つけないように、歯を切り取ってしまうのですが、この句は、その処置をしていなかったのか、噛まれたのか、あるいは河豚でも表面にたくさん棘があるハリセンボンだったのか。いずれにしても手に傷をつけてしまったのですね。河豚は目が丸くて結構愛嬌があるのですが、痛みのあまり憎さが勝ったということですね。「我戀は鰻も・・・」、我が恋の命短しということ。河豚を食って死ぬより前に恋の命は終る。

「鰻汁はいかな・・・」、文字通り坊主は鰻汁を怖れる。坊さんのように、人の道を説き来世を説く腹の据わった坊主さえ、鰻汁ともなれば怖れる。そこが可笑しい。

「河豚賣に・・・」、河豚を食べそうな顔は河豚売には見分けがつく。それが商売ですから。作者は河豚好きを自認しているのでしょうか。

「河豚食ひし・・・」、河豚中毒死は頻繁にあつて、河豚を食うのは賭けのようなものだったのでしょうか。特に毒があるとされる肝が珍重されたのですから、死亡率も高かったということで、食べたあと寝言で念仏を唱えたというのもあながち誇張ではないでしょう。

高橋 > ふふふ！昔の人も、いえ昔だからこそなお一層、寝言で念仏を唱える程、河豚の毒

は怖いものだったのですね。ところで、鰻を食べて毒に中って死ぬ間よりも短い恋なんて…。嵐夕は恋などする資格はないようですね。河豚の句続けま～す。

人心いく度河豚を洗ひけん 太祇

妹が子は鰻くふほどになりけり 蕪村

逢はぬ戀思ひ切夜や鰻汁 蕪村

鰻汁の亭主と見えて上座かな 蕪村

袴着て鰻喰つて居る町人よ 蕪村

会長 > 「人心いく度…」、河豚一匹を調理するのに水一斗を使うとされますが、幾度も洗い流すのは人情だという意味でしょう。

「妹鰻くふほどに…」、「鰻くふほど」は、もはや子どもではないと、言うことですね。

「逢はぬ戀…」、片思いなんでしょう。恋心を断ち切るために、死ぬかも知れぬ鰻汁を食べる。

「鰻汁の亭主と…」、鰻汁の亭主は威張っていたのでしょうか。「場合によっては、一命を落とすかも知れぬ。ここにお集まりの衆。覚悟のほどは良いであろうか。いやいや冗談。滅多に死にはせぬとは申しても、これほど旨いものを食って死ぬならば本望。そうであろ う」、などと話していたのかも。

「袴着て鰻…」、河豚食うは一大事にて正装で臨むという庶民を描いたものですね。

高橋 > 袴の正装でもしもの死に備えるなんて、河豚を食べることは、本当に一大事だったのですね。でも肝試しの様相も呈していたでしょうから、断ると臆病者に見えたりして…。ところで、蕪村にも鰻汁に中って死んで断ち切りたいと思う程の片思いの戀があったのですね。河豚の面白い句、まだまだあります。

河豚の面世上の人を白眼む哉 蕪村

鰻汁の我生きて居る寐覚哉 蕪村

佐殿に文覚鰻を勧めけり 召波

会長 > 「河豚の面・・・」、俎上の河豚は白目を剥いて人間を恨んだ表情をしているということですね。

「鰻汁の我・・・」、鰻汁を食って命を落とすかも知れぬと心配しながら寢床に入ったものの、死ぬこともなく、無事と気づいて安心したのです。芭蕉も、「あら何ともなやきのふは過てふぐと汁」という句を詠んでいますね。

「佐殿に文覚・・・」、源平盛衰記に出てくる場面らしいですね。平家に追われていた文覚というお坊さんを匿ったのではないかと疑われ、平家の役人が乗り込んできて、ちょっと反論しただけで、佐殿は鞭打たれる。友情厚い佐殿を文覚は精一杯もてなすとの意ですね。

高橋 > 本日も面白いご解説、有難うございました。何度も思わず笑ってしまいましたが、残念ながらお時間になってしまったようです。最後に今日の季語を使った虎造節で締め下さいね。

会長 > はい、はい、それでは。

♪ 鴛鴦とおお呼ばれ仲良き夫婦なあり

夕餉の鮫鰯おおお鍋つつきいいいい

かたりあううなり明日は牡蠣食べようと♪